

◆「友情」による支援の  
継続を

～コープあいち  
復興支援の旅

コープあいち  
東日本大震災被災地支援担当  
岩本 隆憲氏

現地に常駐し、半年  
近くたちますが、現地  
のニーズに変化が起  
きてきています。

岩手に来る団体の  
支援ツアーの多くは、  
作業をして帰ってい  
くボランティア・ツア  
ーです。そこには交流  
がありません。

民家の手伝いをす  
れば民家の方との交  
流はありますが、だい  
たいは一時的なもの  
になってしまい、仲間  
同士の交流はあつて  
も被災者との交流は  
あまりありません。

交流を作るには地  
元の支援団体が間に  
入って、力を貸してい  
ただくことが必要で  
した。

この間、コープあい  
ちで行なってきたタ  
オルのお届けでは、現  
地のボランティア団  
体の皆さんの協力が  
得られ、各地でコー  
プあいちの支援メッ  
セージを伝えてもら  
えたことで、被災さ  
れた方との交流につ  
ながる変化が起き  
ました。

そういう地元の支  
援団体とコープあい  
ちがつながった協  
力関係を、地元の方  
々は「友情」と表現  
しています。



支援の旅、参加者の皆さん。

愛知から岩手へ タオルがつないだ復興支援の旅

津波で深刻な被害を受けた岩手の気仙  
地区（大船渡市、陸前高田市、住田町）  
への復興支援に取り組むコープあいち  
は、10月28日から30日にかけて、「『あ  
なたがつなぐ復興支援』～愛知から岩手  
へ、往復1,800kmの旅～」を行ない、組  
合員39人が参加しました。

今回の旅では、碁石海岸（大船渡市）  
での清掃活動や仮設住宅への訪問を行  
ない、交流会も開催されました。

コープあいちでは、発災当初から炊き  
出し支援やタオルを贈る活動を行なつ  
ています。贈られた23万枚のタオルは、地  
元のボランティア団体である「樺の里・大  
船渡ガイド」の方が、避難所や仮設住宅  
の皆さんを訪ねて近況や要望を聞きな  
がらお渡ししたことで交流が深まりました。

ガイドの会事務局長の佐々木典子さん  
は「被災者された方、コープあいちさん、  
そして、ボランティア団体のつながりを  
さらに強めて今後の支援に活かしたい」  
と話していました。（左欄にて関連記事掲載）



海藻やゴミを拾い集めるボランティアたち。



被災された方の話を、真剣な表情で聞く参加者。

「また、おいしいキュウリが食べたい！」



シャベルで泥をすくっていく。



かき出した泥が入った土のうが、ハウスの前に並ぶ。

10月22日、宮城県石巻市の「めぐみ  
野※」キュウリ生産者である鹿野昭さん  
のビニールハウスで、復旧作業ボラン  
ティアが行なわれました。参加したのは、  
みやぎ生協職員とその家族、そして取引  
先業者の計24人です。鹿野さんは、震災  
以前は、700坪もの面積で栽培を行な  
っていましたが、津波でハウスが押し流  
されました。

みやぎ生協では、6月にも、ハウスに  
たまったがれきの撤去作業を行なつて  
います。今回は、津波の影響で畑にた  
まった泥を、元の畑の土が出てくるま  
で15cmほど取り除き、土のう袋に詰  
める作業を行ないました。

キュウリの栽培には課題も山積です。  
津波で塩水化した井戸水はキュウリ  
栽培には使えません。設備投資費用  
の問題もあります。そこで鹿野さん  
は「塩害に強い小松菜などから栽培  
をはじめ、いずれはキュウリの栽培  
を再開したいです」と話していま  
した。

※ みやぎ生協の産直ブランドの名称。